



一貫コース通信

努力が、汗が天才を生むのです

桜の花に祝福されて、福島成蹊中学校に15名が、高校生は302名が入学しました。新入生諸君入学おめでとう。中・高生が集う学び舎で『校訓』の体現者たる“魅力溢れる、問題解決能力を備えたヒト”となるべく、共に励んで参りましょう。その為にも、先輩は後輩に対し思いやりの心を、後輩は先輩への尊敬の念を持って下さい。

さて、本年は開学から110年目を、一貫教育も15年目を迎えました。本学が一世紀を超え発展出来た要因は校訓の『桃李の精神』を堅持しつつ、時代に適った常ならぬ努力を続けて来たからに他なりません。この事を表す格言“不易流行(ふえきりゅうこう)”は、物事にはその本質として変えてはならないものがある一方、時代と共に変化しなければならない理(ことわり)のある事を教えてくれます。また、これは国の趨勢や学校の在り方に止まらない、人の成長にも通じる事です。

歴史の一コマを紹介します。大航海時代の幕開けをきっかけに、全世界各地の様々な人々の生活の実態が解って来るのですが、残念な事に、白色・黄色・黒色…人種…云々のヒトの分類が出来てしまいました。しかし、この人種の括りは、“生物学的種”の概念では、全く根拠を欠いた誤りなのです。生物学では“ホモサピエンス”で、肌の色など無関係で同種です。しかし、環境を要因とする生活様式の違いが、文化・能力の優劣に見え無くもなく、残念ながら肌の色でヒトの優劣を決めてしまったのです。これに強く疑問を持った一人が、英国の博物学者“チャールズ・ダーウィン”です。後にビーグル号で、世界各地を航海し、観察した事実から生物の形態を研究し【進化論】に辿り着くのですが、目覚めのキッカケは、彼がホッテントットを港で観た時の衝撃に(人なのに…?)行き着きます。つまり、肌色の違いや外観に因る優劣への疑問と、その事に対する“不快と怒り”だったのです。私など、とてもダーウィンの叡智に比するものではありませんが、経験から断言できる事は、多くの人が思っているほど個人の能力の差など無いと言う事です。平易に言えば、生来勉強が出来るヒトと、そうで無いヒトなど居りません。勿論、優劣など絶対に在りません。しかし、実際に見られる差の要因はと聴かれたら、躊躇なく目的に対する想いの強さ、成長への意欲と答えます。つまりは“こころ”の持ち方の差なのです。さあ、希望に満ちた成蹊ビーグル号の船出です。共に成長すべく邁進して参りましょう。

『天分、これを持たない者が居ようか。

才能、単なる子供の玩具。

努力こそが人を“ひと”とし、

汗のみが天才を創る。』

—ドイツの詩人・テオドール・フォンタン—

